沖縄のロウヤ ～森奥からの慟哭と残像～

いつもの授業では見せることの少ない真剣な表情で、話に集中して耳を傾けている学生達が眼前にいる。

初夏を思わせる気温と時折小雨が交じる中で訪れた「監置小屋」について、精神保健福祉士養成科目の授業で紹介した。

人気（ひとけ）のない老朽化した母屋、隣接するコンクリートブロックの小屋、その屋根に生える大きなシュロ等の草木、薄暗く湿った内部、土床に人一人身を横たえられる狭小（きょうしょう）さ、壊れた鍵、食事を差し入れる小さな窓や排泄のための穴。小屋の前に立ったとき、最初は金縛りにあったように身体が動かなかった。案内してくださった人や同行した人と言葉を交わしていくうちにゆっくりと、沈鬱（ちんうつ）で深い悲しみの漂う現実が迫ってきた。木立から時折聞えてくる鳥の声が、閉じ込めた人と閉じ込められた人の落涙（らくるい）のささやきにも変わっていくようだった。

刺激がやんだ今も残る感覚の興奮をどのように表現し、精神保健福祉を学ぶ学生にどうやって伝え感じてもらったらよいのか、うまく言葉をみつけられないまま、体験や感じたことを率直に語ってみた。

学生は既に他の授業でも、精神医学史や法律の変遷（へんせん）、私宅監置、呉秀三（くれしゅうぞう）などについて学んでいたが、実在する小屋に監置されていた人の思いを想像したり、周辺の苦しみや痛みを考えたりすることなどはこれまでなかった。沖縄の精神科医療・保健福祉の歴史、精神障がい者の排除、本土よりも長く疎外された状況は過去の問題ではなく、今に続く「現在の問題」として捉えながら、グループワークの中で共有し、それぞれが精神保健福祉士としての自分の立場や役割等を考えていた。

今回の機会を得て、戦後が長かった沖縄には、日本の精神科医療・保健福祉の課題が凝縮（ぎょうしゅく）されて横たわっている現実があること、単に病床が削減されて地域生活支援が主流となればよいのではなく、人が孤立しないための仕組みや差別・偏見のない社会の必要性をあらためて感じ、今後の自身の実践にいかしてゆきたい。

北星学園大学 社会福祉学部 望月和代

監置小屋の視察見学を行なった皆様から、感想のご寄稿をいただいています。
関心をお寄せいただき、また言葉を残していただいて、ありがとうございます。